

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	伊崎 翼
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
社会的排斥からの回復に関する研究 -注意の向きと感情調整に着目した検討-			
論文審査担当者			
主査	准教授	小川 景子	
審査委員	教授	坂田 省吾	
審査委員	教授	岩永 誠	
審査委員	教授	関矢 寛史	
〔論文審査の要旨〕			
<p>集団からの仲間はずれである社会的排斥が生じると、欲求脅威と呼ばれるネガティブな主観感情が生じる。このネガティブ感情は他者から受け入れられること（受容経験）で回復することが報告されている。本論文は社会的排斥からの心の回復過程について、中枢メカニズムの観点から検討を行うこと、さらにこのメカニズムをもとに回復を促進させる方略の提案を行うことを目的としている。中枢メカニズムの検討には、特定の事象に対する注意の配分量を反映する脳電位（事象関連電位：P3b成分）を用いており、本論文は7章から構成されている。</p> <p>第1章では、受容経験による社会的排斥からの回復に関する先行研究とその問題点を概説し、本論文の着目点を提案している。本論文では以下の2点、①受容経験による回復過程に関する個人差について、②社会的排斥および受容により感情の変化が生まれる際の中枢メカニズムについて、着目している。中枢メカニズムの検討には、刺激（排斥および受容を反映する手がかり刺激）に対する注意配分（P3b振幅）と感情の変化に焦点を当てている。</p> <p>第2章では、回復過程に影響を及ぼす個人特性に関して検討している。結果、特性自尊心が高い個人は、社会的排斥によるネガティブ感情が高いほどその後の受容経験によってネガティブ感情が低下することが示された。これに対して、特性自尊心が低い個人は、このような関連は示されなかった。この結果より、特性自尊心が低い個人と高い個人とでは、回復におけるメカニズムが異なる可能性を示唆している。</p> <p>第3章と4章では、特性自尊心が低い個人と高い個人で回復におけるメカニズムが異なる背景（中枢メカニズム：刺激に対する注意配分と感情の変化）を検討した。第3章では、受容に対する手がかり刺激における注意配分（P3b振幅）と感情の変化を検討している。結果、特性自尊心が低い個人は高い個人よりも、受容手がかりに対する注意配分が小さく、かつネガティブ感情の低下も弱い（回復の程度が低い）ことが示された。第4章では、排斥に対する手がかり刺激における注意配分と感情の変化を検討した。その結果、特性自尊心が低い個人は高い個人よりも、受容を経験した際も排斥手がかりに対する注意配分が小さいことが示された。</p> <p>以上の結果より、特性自尊心が低い個人は、自身を取り巻く環境を把握するための手がかり（受容と排斥手がかり）に対して注意を向けることができず、これが受容経験による回復の程度を弱めている可能性が示唆された。</p>			

第5章では、これまでの検討を踏まえ、特性自尊心の低い個人について、受容と排斥手がかりに対する注意配分が増大すれば、回復の程度も促進するかどうか、検討を行った。検討の結果、受容手がかりに対して積極的に注意を向ける（受容された回数を数える）ことで特性自尊心の低い個人においても、受容手がかりに対する注意配分が増大し、ネガティブ感情も低下（回復が促進）したことが示された。この際、排斥手がかりに対する注意配分も増大したことが示された。

第6章では、排斥手がかりに対する注意配分が増大することで、回復の程度が促進される背景に関して検討を行った。具体的には、注意を向ける範囲が感情調整に及ぼす影響についてP3b 振幅を用いて検討した。結果、主課題に対して周辺に呈示される刺激に注意が向くことで、ネガティブ感情が抑制（調整）されることが示された。

第7章では、社会的排斥からの心の回復過程について、中枢メカニズムを基にモデル化し、受容手がかりに対して積極的に注意を向けることで、同時に周辺の刺激（排斥手がかり）にも注意が向き、これら一連の注意配分の変化により、回復が促進されることを提案している。

本論文は、排斥からの回復に関する中枢メカニズムの理解に貢献するだけでなく、排斥を経験した個人が自らの力で回復を促進させる方法を提供するための一助になるものとする。以上の成果は、これまで現象の記述で留まっていた、社会的排斥からの回復過程に関して、中枢メカニズムの観点から検討した点が独創的である。学術的及び社会的価値は大きいと判断され、審査員一同はその成果を高く評価した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。